第１回平塚市新文化振興指針策定検討専門委員会の概要

日　時：平成 21 年 7 月 29 日（水）　14：00～16：00
場　所：平塚市民センター大会議室
出席者：小中山委員長、平野副委員長、石井委員、石川委員、岩崎委員、大野委員、土井委員
中野委員、森委員
（事務局）関本市民部長、増田文化・交流課長、阿部文化交流課課長代理、小菅主査

【次第】
１　開会
２　委嘱状交付
３　市民部長あいさつ
４　委員会設置の趣旨説明
５　委員紹介
６　正副委員長の選出
７　委員会傍聴者入出について
８　議事
（１）これまでの経過
（２）平塚市市民文化基本構想の概要について
（３）平塚市市民文化意識調査の概要について
（４）意見交換
９　その他
10　閉会

【議事録】
（１）経過の説明
（２）平塚市市民文化基本構想の概要説明

委員長　：これより次第に従い、議事を進行する。事務局から議事（１）これまでの経過及び（２）平塚市市民文化基本構想の概要について説明をお願いしたい。

事務局　：［これまでの経過及び平塚市市民文化基本構想の概要を説明］

委員　　：基本構想に掲げた内容の総括はされているのか。振り返りがないと新しいものに取り組んでもどうかと思う。

事務局　：現在関係課へのヒアリングを含めて、内容を照会中であり、次回の委員会に現構想の総括を報告させていただく。
　この場で報告できる範囲では、構想の中の文化財団については設立されている。また、文化振興基金については、設置したが、目標額が未達成の状況である。基金創設当初は、目標金額を積み立て、その果実を文化財団の活動資金として利用する予定であったが、まだ果実を運用したという実績はない。

事務局　：基金の設立当初の目標額は 12 億円としていたが、平成 17 年に要領を改正して目標額を設定しないこととした。

委員　　：文化振興基金については、平成 17 年には何らかの理由で改訂されたとのことだが、この基金は、ある程度積み立てられた段階で、その果実を財団の費用として利用するという理解でよいのか、もう少し詳しく説明願いたい。

事務局　：文化財団については、平成 11 年の設立の段階で３億円の基本財産が必要となり、

市は基金への市支出金からの２億円を含めて、合計３億円の出資を行った。
基金創設から平成 17 年までは目標額の 12 億円は設定されていたが、平成 18 年に美術館の絵画購入の指定寄付があり、その受け皿として基金を活用することになり、そのままで基金に組み込まれると、指定された絵画購入ができないため、基金の要領を改正した。
　文化振興基金のあり方については、今回の指針策定にあたって、皆さんの意見を踏まえて、今後の方向性を考えたい。

委員長　：次回に詳しい説明があるということなので、次の議事（３）平塚市市民文化意識調査報告書に移りたい。

（３）平塚市市民文化意識調査の概要について

委員長　：先ず、事務局より平塚市市民文化意識調査報告書について説明をお願いしたい。

事務局　：［平塚市市民文化意識調査報告書について説明］

（４）意見交換

委員長　：これから意見交換に入りたいと思うが、意見・質問はないか。

委員　　：意識調査の回収数は 1,200 となっているが、これで十分と考えているか。

事務局　：統計学的には問題がないと考えている。

委員　　：カラオケで歌を歌うことは、どの選択肢に入るのか。

事務局　：調査項目を設定する際には、事務局で検討を行った。できるだけ前回の調査との比較検討というか、推移を把握するために、前回と同様の内容とした。もちろん新しい項目、例えばメディア芸術等は追加をしている。

委員　　：カラオケは歌を歌うだけではないと思う。楽器演奏で音がうるさくてもスタジオを借りるにはお金がかかるという理由から、手軽で、安価なカラオケを借りて練習する人もいると聞いた。

委員長　：今回策定する文化振興指針は、文化振興の方針を策定するものである。このため、具体的にこうしたい、ああしたいということを委員から出してほしい。
　団体ヒアリング調査の意見として「文化の後進地だったが、改善されてきた」という趣旨の意見がある。もちろん市民や行政の努力によるものだとは思うが、改善された要素は何か。

委員　　：平成５年に基本構想が策定されたのは、平塚に管弦楽団ができた頃と感じている。それまでは、いろいろな文化活動団体があっても、まとまって何かをするということはなかった。それぞれが、平塚市ではなく、藤沢市や横浜市で活動をしていた。それが市内で活動をするようになって、いろいろな団体が一緒になって活動をし、文化財団もできた。音楽だけでなく、演劇などの他の文化活動団体も同じ傾向である。

委員　　：少し前の話になるが、出縄で薪能が開催された。能には「中入」といって、途中で主役であるシテ方が一旦そでに引っ込むことがある。それを知らない客が、シテ方が下がったときに拍手をして、客が帰り始めたということがあった。それを知った演者が怒ったそうである。怒ったのは、能とはどういうものか、「中入」とはどういうものかということを主催者は事前に客に知識を与えるべきであったのに、それをしないままで、結果として演者に失礼な状況になってしまった。４回程度行われたが、その後、なくなってしまった。企画をした人は、能を上演することだけで満足してしまったようである。

一方、平塚八幡宮でも８月に能を上演している。こちらは 10 年ぐらい前から観客に、事前に能とはどういうものかの講習を行っている。特に、伝統芸能は上演するだけでなく、事前に知る機会を設けたり、観客の能を見る土壌をつくることが必要である。

調査の結果で「伝統芸能」が伸びた要因にはこのような取り組みも影響したのかとは思う。

委員長　：文化芸術は、時に上から目線になるところもある。また、ある部分の人は阻害してしまう面もあると思う。

アンケート調査結果をみると、余暇の過ごし方は思いと実際には食い違いがある。積極的に関与しながら、活動するということは少ないが、与えられるものはある。文化芸術に関するチラシなどによって情報を得て、まちをぶらつくことが文化芸術の活動につながっていくような街になればよいと思うが、実際はできていないというように調査結果を読み取った。

自分が暮らしている実感としてもそのように感じている。

委員　：情報について、市の「広報紙」が最も多くなっている。広報紙を入手するには日刊紙を取っていなければならないが、若者や外国人は新聞をとっていない。今後、情報源のあり方は変わってくると思う。

事務局　：市の広報紙は、日刊紙７紙の朝刊に折り込んで各家庭に配布している。

委員　：回覧版を利用できないのか。

委員　：回覧版の場合、自治会に入っていないといけないが、自治会加入者も少なくなっている。広報紙だけという情報源ではこれからは難しいと思う。インターネットを利用すればいつでも情報を得ることができるのではないか。

委員　：市民センターの入場者数に関するデータはあるのか。イベントによって入場客に差があると思うが、その差は何か分析しているのか。

委員　：イベントごとの入場者数、アンケート調査は実施している。それらをベースに事業計画を企画委員会に諮り、そこでいろいろなジャンルを網羅するように検討をしている。

入場客が入るものばかりを企画するのではなく、観客が入りそうになくても上演する価値のあるものは行っていく。企画については、入場料の高低ではなく、市民の関心、演目によって異なる。たとえば、「笑い」があるものは世代に関係がなく、とっつきやすいようである。

委員　：10 年ぐらい前は、市民センターで伝統文化の演目の時に、チケットが売れ残ると、有効活用の視点から、外国人住民を招待していた。日本文化の理解という観点からもとてもよい取り組みであったが、担当者が代わって、そのような対応をしてもらえなくなった。

委員　：これから策定する指針のボリュームがわからない。平成５年に策定している基本構想の体系図があるが、これの一部見直しか、全部見直しなのか。

体制の資料を見ると、これから原案を作るということであるが、原案を作成してもらって、それに対して意見を言えばよいのか。

事務局　：基本構想策定から 16 年が経っており、この間、市総合計画も新しくなっている。総合計画に合わせて、必要なところは見直していきたい。

現在の基本構想には、すでに完結しているものもある。基金や文化財団については今後の運営等についてもご意見をいただきたい。それ以外の事業については現在照会等をしている段階である。

事務局　：基本的には、現在の基本構想と同じボリュームで新たなものを考えている。原案は庁内各課や会議で意見をいただき、取りまとめ、この会議へは事務局から案として提出させていただきたい。

委員　：アンケートの結果などからも進んでいる部分はわかる。この中で受動的な活動は多いが、能動的な活動は少ない。それをどうしたらよいのかについて、考えていることを提言していけばよいのか。

事務局　：昨年度の調査以外でも、団体等からの意見も出していただけるとよい。

委員　：スケジュールをみると、骨子、素案を検討して、案として取りまとめることになる。事務局からたたき台の案を出していただけるということで、自分が感じていることを言えばよいのか。

私は、子どもたちの育ちについて心配をしている。子どもの身体の成長をみると、以前は身長の伸び率が最も高いのは、中学２～３年生にかけてであったが、現在では、中学１年生が最も高い。これは男子の状況であり、女子はもっと早い。身体は早熟になっているが、心の成長は追いついていないし、逆に遅くなっている。これは体験不足、経験不足が原因している。子どもたちには様々な良い体験をさせてほしい。

委員　：文化ホールの建設はどのようになっているのか。

事務局　：総合計画でも位置づけられており、今後も建設に関しては必要であり、指針に盛り込んでいきたいと思う。

委員　：文化ホールの建設があるのであれば、「ことば館」がほしいと思う。子どもたちののびのび、いきいきと育つようにしたい。言葉、日本語を大切にしたいと考えている。

７月 24 日付の新聞に静岡県三島市に詩人の「大岡信ことば館」が開設されたとあった。自分が考えていることはそんなに間違っていなかったと感じた。可能性は別にして、意見、思いを述べたいと思う。

委員長　：10 月下旬に第２回の会議が開催されるので、アイデアや意見を出していきたい。

金目地区は平塚市というよりも秦野市に近い。平塚市はＪＲの駅中心に発達しているが、平塚市の北部地域をどのように取り込んでいくかを考える必要がある。その時に東海大学の役割もあわせて考えていきたい。

委員　：文化の担い手の育成が大切である。

先日、三嶋神社のお祭りに参加した。三嶋神社では、地域ごとに子ども神輿がある。ただ、子どもと言っても中学生がメインで、小学生ぐらいから慣れさせている。大人の神輿は女性の担ぎ手が多いことに驚いた。

郷土芸能を伝えていくためには、子どもをどのようにしたら巻き込めるかを考えていた。以前、花巻市を視察し、花巻の祭りでは３歳ぐらいの子どもから祭りに参加していた。これがあるから現在があると確信をした。

三嶋神社のある須賀地区でも小さい子どもの頃から祭りに関わり、担い手を育ててほしいと思う。

委員長　：文化は百花繚乱であるため、どこまでをカバーするのか、実現をするのかが難しいが、市民に有益になる形を作り上げたいと思う。

前回調査と今回の調査を比較すると、自分たちが作り上げる形に変わってきていると思う。

文化の資源に付加価値をつけて、奥深いところから知ってもらい、掘り下げてもらうこともあれば、市民に広く参加してもらうことも必要である。

まちづくりの問題でもあり、若者から高齢者までの視点できめ細かく見ていくことも必要である。きめの細やかさ、目配り、地域・市民の目線で考えていきたいと思う。

９．その他

委員長　：次回の日程を調整させていただきたい。

事務局　：第２回を 10 月 29 日（木）15 時から、第３回を 11 月 20 日（金）14 時からお願いしたい。

委員長　：ありがとうございました。

10．閉会